



満福（まんぷく）の願い

校長 中野尾 奈都江

日本海側の大雪のニュースが流れる中、和土小のカエル池も、朝は薄い氷を張っています。石のカエルの口から出る水が凍り、土台の葉と一緒に氷柱（つらら）になっているのを、子ども達が見つけて驚いた朝もあります。

さて、2月4日は「春が立つ」と書いて春の季節の始まりとされる「立春」です。昔の暦では、この頃が1年の始まりである

とされていました。江戸時代からは、毎年2月4日の立春の前日を「節分」というようになりました。「節分」は春を待つ行事であり、暖かい春を待つ気持ちは、昔も今も変わりません。「立春」の前の「節分」は、春を迎えるための大切な行事です。節分の行事は、「鬼は外、福は内」と大きな声で炒り大豆（福豆）を撒き、年の数より一つ多い数（または年の数）だけ豆を食べます。

また、邪気除けとして柊鰯（ひいらぎいわし）という柊の小枝と、焼いた鰯の頭を門口にさします。季節の変わり目は邪気が入りやすいと言われ、それを除けるために豆まきをしたり、飾りをつけたりしました。最近は、恵方巻を食べる習慣が全国に広がり始めました。恵方（幸運を招く方角）は毎年変わるということで、その方角を向いて恵方巻を丸かじりする風習も人気となっています。時代を超えて、「我が家に福がきますように」という願いは共通です。「福」の内容は、「子どもが健やかに育ちますように」や、「この寒い季節に病気をしませんように」など家ごとに様々であると思います。「健康で、ご飯をお腹一杯食べられる」ということを「福」とすることもあるかと思います。これは、「満腹」であり、「満福」です。福に満ち、幸せな状態です。

1月24日から1月30日までは、文部科学省の定める全国学校給食週間です。この期間は、戦後に学校給食が再開されたことを記念し、給食の意義や役割について理解を深める目的で定められています。戦後、食糧難による子ども達の栄養状態の悪化を背景に、学校給食の再開を求める国民の声が高まるようになりました。アメリカからの救援物資として給食物資が寄贈され、学校給食が再開されました。戦後の子ども達の栄養支援という意味で、脱脂粉乳は貴重な栄養源（タンパク質・カルシウム）として提供されました。脱脂粉乳は、牛乳から脂肪分を取り除いて乾燥させた粉で、当時はアルミ製のバケツで運ばれて、お湯に溶いて飲んでいたそうです。

戦後80年という節目の年に、本校では、11月の全校朝会で、学童疎開を体験した地域の方を招いてお話をいただきました。東京（御徒町）からの学童疎開の子ども達は、お寺で寝泊まりする生活で、食べ物が無くていつもお腹を空かせていたことや、時々面会に訪ねてくる親御さんが持ってきたお弁当を、かき込むようにほおばった子ども達の話を聴きました。食糧難の戦中の子ども達の空腹感を想像することは、なかなか難しいと思います。ただ、今も「健康でお腹一杯にご飯を食べられる」こと、つまり「満福」を願う気持ちは同じです。

春を待つ節目の「節分」に、豆まきで福を呼び、福に満ちて過ごしている今に感謝したいと思います。そして、子ども達、保護者の皆様、地域の皆様の益々の福を願います。



カエル池の氷柱（つらら）